

隠退記念旅行記（7） 臼杵石仏と臼杵城

6月6日（金）に別府から最終目的地・延岡に向かう途中、また、臼杵で途中下車しました。「これを見なかったら死んでも死にきれない」と私が申したのです。見たかったものは臼杵石仏です。私が子どもの頃に写真で見た石仏は頭部のみでした。でもそのお顔に言うに言われぬ平安な静けさを感じていたのです。すぐにタクシーに乗って、磨崖仏群を見学にでかけました。



古園石仏 大日如来像

山の斜面の崖が仏像の住まいでした。この崖は、阿蘇の噴火による溶岩によってできた凝灰岩で、非常にもろい岩に仏像が彫られているとのことで、現在は丁寧に修復、保存されています。驚いたことにこの磨崖仏群が国宝に指定されたのは20年ばかり前とのことです。もっとも見たかった石仏は、左図のように修復されていました。いずれの仏像も穏やかな悠然としたお顔です。また、全体的に豪快で、素朴です。大日如来像や、阿弥陀像は座高3m以上の大きさです。また、思わず笑ってしまう山王山石仏もありました。これらは平安時代後期から鎌倉時代にかけて作られたそうですが、誰が、何の目的で彫ったのか、謎とのことです。59体の石仏を、山道をたどりながら、ゆっくりと拝見することが出来ました。数名の高齢の参拝者が、一つ一つの仏像に手を合わせながら、感嘆しつつ、巡っていました。

先に乗ったタクシーの運転手は路地から路地へと細い道を通り、江戸時代の稲葉氏城下の名残の土蔵やお寺、家々を見せてくれましたので、帰りは、市街地までバスに乗って、臼杵市内を散策し、臼杵城跡に登ってみることにしました。なんと、臼杵城は戦国時代のキリシタン大名大友義鎮(1530-1587)が1556年に、四方を海に囲まれた天然の要塞である丹生島に築城したとありました。



義鎮はザビエルに便宜を与えて、見返りにポルトガルから火縄銃や大砲を輸入し、南蛮貿易を行いました。彼は禅宗に帰依し宗麟と称しましたが、1578年には洗礼を受けてキリシタン教徒になりました。彼の洗礼名「ドン・フランシスコ」の石碑をここで見つけました。彼は一大キリシタン王国を夢見たようです。本拠地の府内（大分市）にはコレジオ（神学院）、病院、教会があったそうです。臼杵公園の中には日名子実三氏による二つの像がありました。

最盛期を示す「宗麟公レリーフ」（左上）と、滅亡した大友家をイメージした「廃墟」（右下）です。諸行無常、盛者必衰のもの悲しい印でしょうか。キリシタンになった宗麟は、寺社仏閣の弾圧を行ったとのことです。権力による強制では生き生きとした信仰は生まれず、弾圧によっても信仰は消されないということを知らされた旅になりました。それにしても、どんなに力ある人間でも、この世界、この自分を越えた、天のみ心を恐れ、求めずにはいられない、小さな存在であることを感じます。ちっぽけな人間に与えられた大きな賜物を心から感謝したい、大切にしたいと思いました。この公園のモミの木は日本で一番背が高いそうです。静まりかえった城跡は美しく、命あふれる緑で一杯でした。

